

日本植民地支配下台湾における台湾人教会独立論 ——廖得 (1889-1975) の文書宣教に着目して——¹⁾

三 野 和 恵

1. はじめに

1920年2月、南部台湾長老教会の刊行物である『台湾教会報』に「維新改良：甲乙談」と題する匿名記事が掲載された。甲と乙という二人の登場人物の会話形式をとる同史料は、次のように書き出されている²⁾。

甲曰く、食・衣・用について外国から学ぼう。どうだろう？

乙曰く、私たちは台湾人だし、外国の礼についてはあまり覚えられない。熱帯に住んでいるし、二重植民を受けている。収入は少なく、支出は重く、物価も高い。

「私たちは台湾人」という言葉から窺われるように、おそらく台湾人によって投稿された同史料は、上の引用に続けて第一次世界大戦以前の欧米各国、日本、台湾における給与や物価を紹介し始める。例えば、一人あたりの平均月給はイギリスでは93円、日本では21円、台湾では10円であった。また、伝道師の年俸は日本では360円から3,500円、台湾では96円から360円であったと記している³⁾。一連の比較の後、この筆者は次のように述べる。日本では欧米よりも給与が低く物価が高いのだから、ましてや台湾では給与はさらに低く物価はさらに高い。このため「台湾の普通の人」は「ボロ服を着て、サツマイモ千切り干しに塩をかけて食べる」貧しい生活をしているにも関わらず、贅沢な欧米文化に憧れ、真似をしたと思うようになっている、と。

1895年の下関条約締結以来、台湾は日本の植民地支配下にあった。同史料はこの外来政権による政治支配に加え、台湾人が他国との経済格差に直面しながら、欧米への文化的な憧れを持つ状況を「二重植民」と表現している。このような問題意識はいかなる背景の下で生まれたのか。また、こうした批判がなぜこの時期に、匿名という形で表明されたのか。

南部台湾長老教会は、1865年に來台したイングランド長老教会によって設立された。上述の『台湾教会報』も、閩南系台湾語をローマ字で表記する「白話字」による宣教文書として宣教師らが1885年に創刊したものである。同教会は1896年には宣教師と台湾人信徒代表からなる中会を設置し、1898年には二人の台湾人牧師を叙任した⁴⁾。一方、1859年にはカトリック教会が、1872年にはカナダ長老教会が台湾宣教を開始し、後者の流れを汲む北部台湾長老教会も1885年に最初の台湾人牧師を任命し、1904年に独自の中会を設置した。

南北の長老教会中会は 1912 年に合同し、これが現在の台湾基督長老教会の前身となった⁵⁾。

一方で、伝道師や牧師の派遣教会、給与額などの教会運営に関わる重要事項の決定権に関しては日本統治期のほとんどを通して宣教師が大きな影響力を保持したため、1900 年代には信徒や聖職者の間で台湾人教会自治が呼びかけられるようになる⁶⁾。例えば、南部台湾長老教会では一部の台湾人聖職者が「南部中会分区自治計画」を推進した。南部中会を高雄、台南、嘉義、台中の四つの区に分け、それぞれに区議会を置いて各地域の自治的宣教実践を目指した同計画は、1918 年 3 月に提唱され、1921 年からの高雄の自治区としての試運転を経て、1930 年 3 月に実現された⁷⁾。また、1928 年には宣教師が設立した台南神学校 (1877) でも台湾人教員と神学生が漢文雑誌『校友会雑誌』を創刊し、台湾人による自治的台湾宣教を試みた⁸⁾。

こうした教会内での動きは、同時期の台湾に巻き起こった反植民地運動とも無関係ではなかった。当時の抗日社会運動やこれに対する志向の広まりは、台湾議会設置運動のような政治社会運動に止まらず、駒込武が指摘するように、台湾総督府の教育政策に不満を持った教会内外の台湾人が、宣教師が設置したミッションスクールである台南長老教中学校 (1885) を「台湾民衆の教育機関」とすべく協力した例においても見出される⁹⁾。

すなわち、上記の匿名記事は、教会組織の中で主導的立場を握ってきた宣教師に対して、台湾人信徒や聖職者らが自ら宣教の主体としての姿勢を打ち出そうとする中で著されたものであった。宣教師が深く関与した『台湾教会報』にて、欧米世界の文化的優越を「植民」と表現した同記事の筆者は、宣教師－改宗者間の序列的關係への問題意識を間接的に示すことを意図したものと考えられる。同史料が匿名記事とされたのも、このためであったろう。

しかしながら、台湾人キリスト者の自治的台湾宣教への志向は、必ずしも宣教師との対立を意味したわけではない。このことは、同史料の匿名筆者が「ただ虚しく他人の文明の外殻を学び、上等人の名声を望む」台湾人キリスト者のあり方を問題とすることで、欧米文化に対する排外主義とは一線を画そうとしたことから窺われる¹⁰⁾。同時に、同史料は台湾人改宗者の「精神文明」の「維新」を呼びかけ、「私たち台湾人」という特殊具体的なローカリティの問題を前面に押し出している点でも特徴的である。以上から、同史料には台湾が置かれている政治的・文化的に不利な立場を前に、台湾人改宗者はいかにキリスト教と向き合い、それを本当の意味で自分自身のものへと内在化するのかという問いが込められていたと仮説的に考えられる。

だとすれば、こうしたキリスト教受容は具体的にいかに模索され、どのような思想的作業によって支えられたのか。本稿はこれらの問題に答えるため、上述の南部中会分区自治計画の推進者の一人であり、台湾人教会独立論者である廖得 (1889–1975) のケースに焦点を当てる。この人物の議論には、排外主義に陥らない「台湾人意識」や、これに根付くキリスト教受容への模索としての意義があったと考えられるからである。

そこで、以下ではまず (1) 廖得の教育経験を 1957 年に彼自身が書き著した「68 年の回想

録」¹¹⁾を踏まえて概観し、その上で(2) 彼が1910年代から20年代までに『台湾教会報』に投稿した記事を分析する。これらの作業により、「台湾人・キリスト者」としての個人的・集団的アイデンティティが、当時の文脈の中でいかに模索されたのかを明らかにしたい。

2. 廖得(1889-1975)の教育経験

(1) 少年期の経験と宣教師ムーディとの出会い

伝道師、後に牧師となった廖得は1889年に二崙仔(現雲林県二崙郷)にて生まれた。両親の廖坤海(c.1849-c.1898)と李知母(c.1852-1911)は彼が生まれる以前に七人の子どもを次々と亡くし、「死んだら天国に行くと言う」キリスト教に惹かれていた¹²⁾。一家は食べ物売って生計を立てたが、父親は廖が9歳の時に亡くなった。暮らしは貧しく、彼は11、2歳になっても8歳の子どものように小柄であったと言う。その頃、二崙仔に伝道所が設置され、両親の影響で以前からキリスト教に興味と好感を持っていた廖は、その集会に通い始めた¹³⁾。

1902年、13歳となった廖得は受洗を希望し、審査を受けるために茄苳仔(現雲林県西螺鎮)教会を訪ねた。この時の審査者であった宣教師キャンベル・N・ムーディ(Campbell N. Moody, 1865-1940)との出会いが、彼が聖職者への道を歩みだす一つの重要な契機となった。審査の結果、廖は入教を認められて受洗した。ところが、その時ムーディは廖得が眼病を患っていることに気づき、礼拝後に彼を彰化の基督教医院へ連れて行った¹⁴⁾。その後の一ヶ月間、廖得はムーディの借家に住まって彼の「街頭説教の実地学習」を受けた。彼はその時のムーディとの会話について、次のように回想している¹⁵⁾。

私が彼〔ムーディ〕に、百円分の本を買えば、それで足りますか？と尋ねてみたら、彼は千円分〔の本を〕買っても足りない！と話した。〔…ムーディは〕私に、お母さんに私は伝道師になっても良いですか？もしも良いなら、三年間小学で、三年間中学で、四年間大学で勉強しても良いですか、と尋ねさせた。勉強はすればするほど良い！

「小学」とは教会附設の学校を、「中学」と「大学」とはそれぞれ台南長老教中学校と台南神学校を示す。引用文からは、ムーディが廖の聖職者としての歩みを積極的に牽引・補佐しようとしたことが窺われる。

続けて、廖得はムーディがカトリックとプロテスタントの違いについて教えてくれたことを回想している。曰く、カトリックは「イエスの十字架の贖いを信じる」。また、ペテロは「天国の鍵」を管理する権威を、慈悲深い聖母マリアは人々を主イエスに執り成す権力を持つと信じる。「聖人たちの功德の庇護を信じ」、修行、神父への告解や、死後には罪を清める煉獄での過程を経て赦されると信じる。一方、プロテスタントも「イエスの十字架の贖いを信じる」。しかし、信徒は皆「ペテロと共に天国の鍵を持ち、人を天国に導く」宣教能力を

持つと考える。淡々とした文体で述べつつも、廖は、ムーディがカトリックの救済観はプロテスタントとは異なり、イエスだけでなく、修行などの様々なルートで「罪が赦されると信じる」ものであると特徴づけていたことを捉えている¹⁶⁾。

廖が回想するように、ムーディにはプロテスタント宣教師としてカトリックとの距離感を明確に意識する面があり、宣教文書においても唯一の救済への道としてのイエス・キリスト、罪の認識と信仰義認といったテーマを中心的に論じていた¹⁷⁾。こうした宣教姿勢は彼の長老派スコットランド人としての宗教的感性や、台湾における宣教経験と密接に関わっている。

ムーディは1865年にスコットランド自由教会信徒の家庭に生まれ、グラスゴー大学(1880-84)と自由教会神学校(1885-88)での学びを経て牧師となった。1890年からグラスゴーの貧困地区での宣教活動に従事した後、1895年12月、日本に「割譲」されて間もなかった台湾での宣教に参入した¹⁸⁾。彼は既存の教会や医療・教育機関の運営ではなく、街頭で台湾の人々に呼びかけ、対人的な関係の中でキリスト教について語る説教活動を重点的に行った。その結果、彼は日本や英国を問わない「文明国」による植民地支配への懐疑的姿勢を示し、民族的・宗教的他者をネガティブなイメージによって類型化することで宣教を正当化するキリスト教会のあり方を批判的に内省した¹⁹⁾。

一方で、ムーディは台湾の人々によるキリスト教の選択的受容の傾向への洞察を通し、これらの人々は信仰義認、キリストの降誕と贖罪の意味、聖霊の働き、洗礼と新生の意味などを理解していないと捉えた²⁰⁾。このため、彼はその宣教文書のトピックとして信仰義認やキリスト論における逆説性——罪人が救われる、それもイエスの十字架での死という「弱さ」によって成就されるということ——を意識的に取り上げた。同時に、彼のこうした問題意識は、台湾人を含む非ヨーロッパ世界の人々には、背後に二千年近くものキリスト教的文化の累積を有するヨーロッパ世界出身者とは異なり、キリスト教の教えを理解するための「精神」が十分には整っていないとする歴史観につながった。このため、宣教開始当初のムーディは台湾人教会の自治・自養能力を認めると述べる一方で、その自伝能力に留保をかけ、宣教師のリーダーシップを主張していた²¹⁾。こうした宣教論は後にムーディ自身によって修正されるが、それは台湾人教会自治運動を受けた1920年代末以後のことであった。

(2) 学びの喜びと宣教師ムーディへの評価

一方で、以下に述べるように、廖得自身は1920年代末以前のムーディの宣教姿勢の中に台湾人教会自治運動と調和するものを見出していた。1902年の受洗と彰化での宣教「実地学習」の後、母親のもとに戻った廖は二崙仔の伝道所にて交代で説教を担当するようになった。彼はその後もムーディが巡回宣教で二崙仔を訪れる度に、自身を含む6名の信徒と書物を読む勉強会を行っていたことを回想している。この勉強会が具体的にどう行われ、そこでどのような書物が用いられたのかは不明であるが、その経験を「まるで飛行機が飛んでい

るみたいで、本当に面白かった！」と振り返る廖得の言葉からは、彼がこの学びの作業に喜びを感じていたことが窺われる²²⁾。また、ムーディは学費の捻出に困っていた当時の廖に「十年分の本を一年で読もう」と言って、「一生分の学費、私に十数円を応援してくれた」という。「一生分」とは廖の強調表現であろうが、幼少より貧しい暮らしをしてきた彼にとって、それほどの意味があったということだと思われる。こうした経験を振り返り、廖は「私は良い先生に師事した」と述べている²³⁾。その後、廖得は店員や月2円で派出所のお手伝いの仕事で学費を貯め²⁴⁾、1910年に21歳で台南長老教中学校に、翌1911年に台南神学校に入学し、1915年の卒業後に伝道師となった²⁵⁾。

廖は、以上のような自身の教育経験とムーディとの師弟関係を振り返った上で、ムーディの宣教手法を現地教会の独立を志向するものとして次のように評価した。すなわち、ムーディは信徒のいない土地で街頭説教をして、ある程度信徒が集まり始めると「天国の鍵」を彼らに託す。教会を建てるに相応しい土地を見つけたら、まずは即座に私費で購入する。多くの女性執事を任命し、19歳の未婚男性も長老に任命した。「また台湾人に牧師になるように促し、〔自身もそのために〕働き、寄付もして、それを支えた」。彼は自分が受け持つエリアの教会の老若男女、富貴貧賤を問わないすべての信徒に、毎月少なくとも5銭から貢献して相互補助基金を集めるように呼びかけた。「補助会」の創設である²⁶⁾。

管見の限り、他の史料でこの「補助会」に言及するものとしては廖自身が1923年に『台湾教会報』に投稿した「教会の独立」という論説文、及び1940年に牧師・楊註（生没年不詳）が同系列誌に寄せたムーディ追悼漢詩しか確認されない²⁷⁾。このため推測の域を出ないが、「補助会」は在台イングランド長老教会組織や南部台湾長老教会の中間からの指示ではなく、ムーディ、及び彼が受け持っていた中部台湾エリアの台湾人聖職者の間で独自に取り組まれたものであったと考えられる。

以上の記述から窺われるように、1957年時点の廖得は自身の「先生」と見なすムーディの宣教姿勢の中に「天国の鍵」を台湾人信徒に託す自治的教会運営への志向を見出していた。さらに、廖得はキリスト教への改宗を、学ぶことの喜びや「独立」と密接に関わるものとして捉えていた。このため、「勉強はすればするほど良い」として、廖得の進学を助けようとしたムーディは、廖が「天国の鍵」を持つ独立した信仰者となることを支えた人物としても認識されたと考えられる。

それでは、1920年代半ば当時の廖得はいかなるキリスト教論を形成していたのか。また、それは彼の学びへの情熱や、教会自治論といかなる関係にあったのか。

3. 文書宣教活動と教会独立論

(1) 雑誌媒体による個の自治的学びへの呼びかけ

廖得は神学校在籍中の1913年以来、1950年代に至るまで多くの文章を『台湾教会報』系列雑誌に投稿し続けたが、本稿では上述の台湾人キリスト者独自の雑誌媒体である台南神学

校『校友会雑誌』が創刊された 1928 年を一区切りとし、これ以前の廖の投稿文に焦点を絞る。この時期区分に即して『台湾教会報』の記事を見渡すと、廖の投稿文は計 37 本を数える。

これらの記事は、内容に即して「情報・紹介」、「論説」、「その他」に大別でき、これら三つもさらに次のように分けた。すなわち、「情報・紹介」記事は①「教会、及び関係機関の紹介」、②「宣教関連出版物の情報」、③「議事録の転載」、④「海外の情報」に。「論説」は⑤「神学」、⑥「教会独立論」、⑦「教育」に。「その他」は⑧「追悼文」と⑨「回想」に。これらの記事タイプの相違を踏まえつつ、廖得の 1930 年までの『台湾教会報』への投稿状況を整理したものが下表である。

表 廖得による『台湾教会報』への投稿状況 (1913-1930)

発行年月 年 月		巻号	ページ	記事タイトル／タイプ	発行年月 年 月		巻号	ページ	記事タイトル／タイプ
1913	12	345	1-2	恒春（共著・陳朝明）／①	1924	4	469	2	南部中会／③
1914	5	350	3-4	恒春教会（共著・陳朝明）／①				8-9	安い牧師／⑥
1916	1	370	9-10	リ・ラウオンの小伝／⑧		5	470	9	アメリカ禁酒の成績／④
1920	2	419	11	教会の消息：頂山／①		6	471	10-11	お腹の中の感化／⑦
	3	420	3-4	台南医館／①				11-12	キリスト教徒の常識、完全な教育／⑦
	6	424	10-11	台南医館／①		7	472	10-11	内外教会の消息／①
1921	1	430	12	ホおぼちゃんの小伝／⑧		8	473	4	武官の修養／⑦
	3	432	12	宣教文書／②		9	474	2-3	朝鮮宣川教会／④
	10	439	9-10	イエスとは何か？／⑤		10	475	8-9	佳里教会／①
1923	2	455	1-2	内地の牧師／⑥		11	476	11-12	南部中会／③
	4	457	10-11	実験のキリスト教／⑨		12	477	4	臨時中会／③
	8	461	3-4	教会の消息：山豹／①				13	刊行物の紹介／②
			10	教会報への投稿について／②	1925	11	488	15-16	会友のニュース／①
	9	462	1-2	教会の独立／⑥		12	489	15-16	東部教会巡回記／①
	10	463	1-2	教会の独立／⑥	1926	1	490	3	中会議案／③
3-4		救霊団／①		13			給与負担表／②		
12		465	3-4	雑事：刊行物の紹介／②				15	会友のニュース／①
1924	3	468	6-7	上等なキリスト教徒／⑤		2	491	4	南部中会／③
		14	廉価書籍の紹介／②						

記事タイトル／タイプ欄の番号は、以下の記事タイプを示す。①…教会、及び関係機関の紹介、②…宣教出版物の情報、③…議事録の転載、④…海外の情報、⑤…神学、⑥…教会独立論、⑦…教育、⑧…追悼文、⑨…回想。

参考文献：『台湾教會公報全覽：台灣第一份報紙』第 5～9 卷 (1907-1930)、教會公報出版社、2004 年。

表からは、1930 年以前の廖が特に 1923 から翌 24 年に集中的に投稿活動を行い、その記事の多くが「情報・紹介」タイプであるとわかる (25 本)。このうち 12 本を占める①「教会、及び関係機関の紹介」は、巡回宣教・牧会の報告である。1924 年 4 月以降に見られる③「議事録の転載」記事は南部台湾長老教会の中会議事録の白話字訳文であり、これらは同年に牧師に叙任された廖が翌 25 年にかけて南部中会の書記を兼任した関係で掲載されたと

考えられる。さらに、廖は少数ながらも台湾の長老教会とは直接的に接点のない海外の社会や教会の様子も報道している。それらの記事には、アメリカの禁酒法(1920-33)の実施状況を報告する「アメリカ禁酒の成績」(1924年5月)や、彼が「世界の教会の模範」と見なす朝鮮の宣川教会の活動状況を伝える「朝鮮宣川教会」(1924年9月)がある²⁸⁾。記述の簡易さに鑑みれば、これらは彼が他の宣教文書が報じた統計データを援用しつつ書いたものだと推測される。

一方で、後者の記事トピックの選択には、教会自治の促進という明確な意図があったことが窺われる。同史料にて廖は宣川の教会が宣教開始からわずか十周年で「完全に自立し、自養、自伝」するようになり、同時代には「牧師3名、長老20名、男性執事33名、女性執事10名、日曜学校の男性教員70名、日曜学校の女性教員80名」を有し、幼稚園から中等・高等レベルの男女ミッションスクール、聖書学校を附設するまでになったこと、宣川全体として見ても人口9,000人余りのうち3,800人以上がキリスト教徒であり、人々がキリスト教に好意的であると報告している。その上で、これらの発展の源は「すなわち『実行』の二文字につきる。皆喜んで人に事え、積極的に自治精神を持ち、皆互いに尊敬の念を持ち譲り合い、敬虔に主を讃える心と熱心に人を助ける志がなせるわざである」と論じ、同教会を教会自治の成功例として位置づけている²⁹⁾。後述するように、この時期の廖は教会独立論を積極的に展開しており、このことに鑑みれば、同記事の題材である宣川教会はその関心に従って選択されたものとわかる。

「情報・紹介」タイプ記事の中でも特徴的であるのが、②の「宣教出版物の情報」記事である。これらの中には、中国で刊行されている漢文宣教書籍や雑誌をいくつか推薦し、その価格や在庫状況を知らせる「宣教文書」(1921年3月)と「刊行物の紹介」(1923年12月、1924年12月)、及び上海の宣教文書出版機関である広学会(1887)の会員を募集する「廉価書籍の紹介」(1924年3月)が含まれる³⁰⁾。いずれも『台湾教会報』の読者に同誌以外の漢文宣教文書を積極的に読むように促す内容となっており、当時の台湾における文書宣教が必ずしも白話字文書のみに焦点化されていなかったことを示している³¹⁾。

一方で、台湾人教会独立論者であった廖得は、文書宣教事業を教会自治促進の目標と密接に関わるものとして認識した。例えば、彼は『台湾教会報』の充実化を呼びかけ、その投稿規則を紹介する「教会報への投稿について」(1923年8月)という記事にて、当時の台湾の教会が既に「宣教の時期から建設の時期に入り」、「自養、自治、自伝」を備える「独立」という「真の進歩」を実現できるかどうかの勝負の時期に差しかかっているとの現状認識を示した。さらに、この「困難で危険」な時期を乗り越えるためには、宣教文書の充実と信徒集団によるそれらの「慎重」な「研究」が必要であると論じた³²⁾。教会自治を実現し、支えるものとしての文書宣教や信徒の自立的な学びへの重視は、漢文宣教文書の購読の勧めとも連動していたと考えられる。

(2) 個の宗教的経験—台湾人による台湾教会を支えるもの

このように、廖得は信徒の自治的な学びを重視したが、それは具体的にいかにして教会の独立と連動するものと捉えられていたのか。⑥の「教会独立論」タイプの記事群から捉えた。まず、廖は「内地の牧師」（1923年2月）と題する一文にて、牧師・沢山保羅（1852-87）による日本「最初の独立教会」である浪花教会（1877）設立の経緯に言及し、同時代の日本に経済的に自立した教会が多いのは、この早期からの取り組みの成果であると評価している³³⁾。

これに対して、廖は南部台湾の長老教会は「宣教57周年、礼拝堂は百余カ所、信徒は二万近いが、現地人牧師は十名足らず」で、「母会」であるイングランド長老教会も人的・金銭的資源の不足に苦しんでいると述べる。だから、各地教会の自立的な取り組みによってこの状況を打開するしかないと強調する。「最も大事なことは、台湾の教会が自らの負担で現地人牧師を招聘する責任を負うことだ。現地人伝道師は台湾の牧師〔となる〕責任を負うことだ。生きても死んでも、台湾人は自分で台湾教会の責任を負わねばならない」³⁴⁾。

当時、南部台湾の長老教会では各地教会が牧師の招聘を希望する場合、その牧師の一年分の給与を前もって準備することが条件とされており³⁵⁾、多くの教会にとって牧師招聘は経済的に敷居が高かった。医学の修得や日本留学などで社会上昇を果たした一部の人々を除けば、同教会の信徒の多くは貧しく、その献金額に限界があったためである³⁶⁾。廖はこの困難を認識しつつも「台湾教会の責任」を負わねばならず、また負うことができる者は「台湾人」だけであると強調する。この考えに基づき、彼は台湾の教会が台湾人牧師を積極的に招聘すること、また台湾人伝道師が台湾の教会に専属する牧師へと積極的になってゆくことを呼びかけている³⁷⁾。

こうした呼びかけは、同年9月及び10月に掲載された論説「教会の独立」にも見られる。同史料にて、廖は「20年前〔1903年〕」にムーディが彰化エリアの伝道師の経済的独立を目指して組織した「補助会」や台湾人キリスト者が組織した相互扶助基金である慈善会（1908）を含む宣教師、台湾人聖職者、及び信徒の努力にも関わらず、南部台湾長老教会の独立が十分に実現されていないという問題意識を表明している³⁸⁾。その上で廖は、同教会の独立に向けての具体的な目標として、すべての教会による「信徒の新生」、「宣教師の修養」、及び「経費の儉約」という三つの条件を挙げている。このうち「信徒の新生」という条件に関して、彼は、教会の自治や自伝は信徒が「生まれ変わる」ことで初めて可能となるのであり、この新生という個人的且つ決定的な宗教的経験に至るまで、信徒は「各々讚美歌を歌い、聖書を読み、祈り、自ら上帝を探し求める」「自養」的な信仰生活を積み重ねる必要があると論じた（傍点は引用者による）³⁹⁾。多くの場合経済面での自立を意味する「自養」という言葉が、ここでは精神面での独立性を示す言葉として用いられている点で特徴的である。

廖はこのような精神的な「自養」を個々の宣教従事者にも要求した。具体的には「祈祷」、

「勉強」、及び「儉約」という三方面での「修養」を呼びかけ、後年の回想録でも触れることとなるムーディとの会話を、ここでも紹介している。「20年前、私はムーディ牧師に『百分の本を買えば足りますか?』と尋ねたことがある。彼は『私は千円分買っても足りないよ、百円分で足りるなんてことがあるのかい』と言った」⁴⁰⁾。

廖は以上のように信徒や宣教従事者に対する提案をした後、各地教会にできる具体的な取り組みとして、「経費の儉約」を呼びかける。同時代は「世界財界の干ばつ期」であり、在台イングランド長老教会も赤字に悩んでいる。だから宣教師たちに「拳で石の唐獅子を殴る」ようなことをさせてはならない。さらに、信徒の経済力にも限界がある。だから信徒たちに「フンコロガシに石版を運ばせる」ようなことをして、無理に献金を要求してはならない。むしろ、各地教会の課題は、「献金の収支の方法に気をつけて、しっかりと管理すること」である、と⁴¹⁾。

それでは、このような台湾人による台湾教会の運営、教会独立論や学びと「修養」への志向は、彼のキリスト教論とのいかなる関係の中で形成され、表明されていったのか。以下、⑤「神学」及び⑦「教育」タイプの記事に焦点を当てて考察したい。

4. 独立した信仰者の確立とそのキリスト論的根拠

(1) 救いは「悲惨」の中にこそ——キリスト教的救済の逆説性

まず、廖得は1921年10月の投稿記事「イエスとは何か?」にてナポレオン(1769-1821)の信仰からの逸脱と改心のエピソードを通して、イエスの救済の業の性格と意味を論じている。廖によれば、ナポレオンは「母親から良い家庭宗教教育を受け、真理を知り、イエスを信じ、上帝を拝んでいた」が、「思いがけずも大将になり、大総統になり、大帝王になり、ついには世界の大英雄に匹敵するとまで言われようになる」と信仰心を失った⁴²⁾。しかし、彼には再び「真理」を知る機会が与えられた。1815年に連合軍に大敗し、セントヘレナ島に幽閉された彼は「非常に苦しみ、日々を失意の中で過ごしたが、幸い一つの真理が彼の心を慰めた」。随行していた者とキリスト教について話し合い、聖書を研究するようになったのである⁴³⁾。

廖はこう述べた上で、キリスト教における救済とはナポレオンが経験したように「悲惨な境遇」の中でこそよみがえると指摘し、イエスの十字架の業もまさにそのような性格を備えるものであると強調する。曰く、キリストは「真に強く」、「全能の上帝」そのものである。だが、その強さや権能は決して「武力」や「権力」としては顕されない。ローマ帝国の植民地支配を受ける「ユダヤ人」であり「大工の子」であったイエスは、この世において「名声もなく」、「権力も持たず」、十字架での「悲惨」な死を迎えた。しかし、この「悲惨」こそが、かえってイエスの権能と救済の性格をより明らかにしたのだ、と⁴⁴⁾。

我々世界の人がこのような非常に恥ずべき死を受けるとすれば、万事はすべて終わった

と思うだろう。なんと不思議なことか！キリストはこのような〔死を通して〕、かれが上帝であるということをかえってより明らかにした。このような辱めを受けることで、世界の人々を導いた。〔…〕強暴で巨大な圧迫力により征服するのではない。このような圧制による征服、奴隷の征服は、キリストが最も忌み嫌うものだ。ゆえに、キリストの武器は愛である。無限の愛である。人の愛ではない、上帝の愛だ。この愛により全世界の人を征服するのだ。また全世界の誠実で、キリストの愛に感動した者は皆喜んで自らの望みに従い、自由な意志により〔キリストに〕よりたのむ。

引用文からは、廖得がこの世的な弱さや恥がその実は神の目から見た強さであると認識していたことが窺われる。こうしたキリスト教における救いの逆説性は、上述のようにムーディが白話字宣教文書にて強調していたテーマでもある⁴⁵⁾。また、上記の言葉は廖が神と人との間には「上帝の愛」の恩恵としての救済と、人間の自由意志に基づく応答の相互関係があるべきとの救済観を持っていたことを示している。「上帝の愛」に「感動」を受けた人は、自らの意志でイエスに降伏する。「強暴で巨大な圧迫力」によって従わざるを得ない状況に追い込まれた「奴隷」の心ではなく、心から従うことを願う「自由」な心による信仰を持つようになるのであり、そうした変化こそが廖が重視する「新生」であると考えられる。重要なことに、ムーディはこの「奴隷」の心の問題にも言及していた。1903年から翌1904年に『台湾教会報』系列雑誌に連載した白話字宣教文書「教義談論」にて、ムーディは改宗者の誤ったあり方として、神への「恐れ」に基づく道德主義的宗教生活への志向を挙げ、こうした姿勢はキリスト教的な「新生」とはほど遠い「奴隷の心」に陥るものと論じていたのである⁴⁶⁾。

このように、廖得はムーディと同様に個々の信徒の自由意志に根付く信仰を重視した。ただし、「悲惨な境遇」という挫折状況こそが「新生」の出発点だと彼が論じるとき、そこには当時のムーディが必ずしも明確には意識しなかった「台湾人・キリスト者」の独立への志向、及びこれを目指すことで直面するであろう困難への予見が伴われていた。このことは、廖が同史料をまとめるにあたり、台湾の教会の「兄弟姉妹たち」に次のように呼びかけたことから窺われる。すなわち、ナポレオンの信仰が「暴風」に倒れなかったのは、母親のキリスト教家庭教育という「善い基礎」のおかげであった。だから、台湾の教会も「来る暴風」に備えて「堅固な基礎」を固めるように、そうすればキリスト者の「生命」は「この世におけるいかなる順調さとその不安定さも、あるいはこの世でのいかなる失敗、逆境の試練と苦しみ」によっても倒されないだろう、と⁴⁷⁾。ここでの「暴風」とは、「生きても死んでも、〔…〕自分で台湾教会の責任を負わねばならない」台湾人キリスト者が、教会建設という課題に直面する「困難で危険」な時期を示すものと考えられる。と同時に、そこにはまた着実に台頭している台湾人自治志向が、既存の権力に向き合う中で直面せねばならない「失敗、逆境の試練と苦しみ」も想定されていたのかもしれない。

(2) 赦された「罪人」たる信仰者の自認—教会の礎として

自らの自由な意志に基づいてイエスに従うことを望む「新生」した個々の信徒の存在がなければ、教会は「暴風」に立ち向かい得ないという考えは、廖が1924年3月の『台湾教会報』に投稿した⑤「神学」タイプの記事、「上等なキリスト教徒」にも表明されている。同史料にて、彼は甲と乙という架空の人物の会話を通して次のように問題提起している。「甲曰く、教会の実力とは何か？／乙曰く、上等なキリスト教徒が教会の実力だ。／甲曰く、上等なキリスト教徒はどうやって教会の実力となるのか？」。これに対して「乙」は次のように返答する。曰く、キリスト教徒の中には「利己主義」的で「非常に嫉み深く、人が善いことをするのをよく邪魔する」「下等のキリスト教徒」がいる。また、「団体主義」的で「何かをするにもいつも他者の力に頼り、虎頭鼠尾に至る」ため、「自分を害し、他者を嫌い、うまくいかず、主は喜ばれない」「中等のキリスト教徒」がいる、と⁴⁸⁾。

これらの言葉を通して、廖はまず教会という集団の「実力」はそこに集うキリスト教徒が「上等」であるかどうかにかかっているとの認識を示している。自らの利益を追求するために他者を嫉み、妨害する「利己主義」者や、他者に頼りつつもこれを嫌う「団体主義」者が集う教会は倒れてしまうか、うまくいかないだろう。こう論じた上で、彼は次のように続ける⁴⁹⁾。

上等なキリスト教徒は独立主義で、〔ベタニヤの〕マリアがその代表者だ。このような人は主に事え、人に巻き込まれず、また人を巻き込まない。人を嫌わず、また人に嫌われることを恐れない。一人で黙々とイエスのためになることをし、一人で黙々とイエスを愛する。また最も大切なものを献げ、自分では取立て用いることのできないもの〔高価な香油—引用者注〕を主に献げる。その人のすることは誠心誠意、素直に熱心にするのであり、ゆえに主はそれを受け入れ、教会の万国万代の模範として用いる。

「上等なキリスト教徒」はあくまで一個人として立ち、イエスに向き合う者とされている。さらに、廖はこの個々の信仰者の独立性が、台湾人教会の独立の実現可能性と密接に関わるものであるとの考えを示し、「上等なキリスト教徒が栄えなければ、我々南部教会の前途は困ったことになる」と述べる⁵⁰⁾。この「一人で黙々とイエスのためになることをし、一人で黙々とイエスを愛する」「上等なキリスト教徒」の姿は、一連の教会独立論の中で廖が述べていた「自養」——「各々讚美歌を歌い、聖書を読み、祈り、自ら上帝を探し求め、聖霊による新生を得る」こと——を実現し、自ずと自治、自伝の準備を整えたキリスト教徒のそれと、ほぼ重なり合うことがわかる。

廖得はこうした個々の信徒、及び組織としての教会の独立性をキリスト教教育によって基礎付けることへの志向を表明した。その教育に対する関心の高さは、彼が1924年に3本の⑦「教育」関連記事を投稿し、教育する側や、学ぶ側の者に具体的な教育の心得や学習目標

を提示しようとしたことから窺われる⁵¹⁾。

以上を踏まえれば、廖得の学びと教育に対する関心は、1957年の回想録を著す以前から既に教会独立論に沿って形成され、明示されていたことが明らかとなる。重要なことに、廖の教会独立論はその実、青少年期の彼自身の経験に深く根付くものであった。このことは、彼がインタビュー形式の文体で著した半生記「実験のキリスト教」（1923年4月）から窺い知ることができる。同史料にて自身の幼少期から1911年の母・李知母の死までの時期を振り返る廖は、「異教徒」であった両親がキリスト教に好意的であったこと、後にキリスト教に改宗した母親が、彼が聖職者になるための準備を整えてくれたことなどを回想し、自らが他者との関係性の中でキリスト教に導かれた者であることを確認している。その上で、廖は次のように述べる⁵²⁾。

問：〔キリスト教が〕そんなに素晴らしいものであるということは、あなたがキリスト教徒になって今に至ったのは、〔あなたに〕社会一般の人と比べて何か優れたところがあったからということですか？

答：とんでもない！私自身は最も悪い者で、身体も弱く、貧しくて学問也没有で、社会〔一般の人〕と比べようなんて思いもしませんよ！それでも上帝に感謝します。「生きているのはもはや私ではなく、私のうちにおられるキリストが生きているのだ」（「ガラテヤ人への手紙」2章20節）。以前とその後の自分自身を比べると、それは天地の差です。つまり、今日の台湾にはキリスト教がある。私はそのことによって生かされているということです。

キリスト教への改宗は自身の功績や優越性を意味せず、自助努力による救いへの脱出でもない。逆に、改宗には「私は最も悪い者」であるのに、生かされているのだという認識が伴われている。このような表現は、「教義談論」にてムーディもまた用いていたものであった点は着目に値する。キリスト教における救済のプロセスを説明する際、ムーディは信仰者の心情を次のように綴っている。「私は危険人物だ。悪人だ。自分を救うことができない。〔…そのような私を〕上帝が救おうとしてくれるのなら、私も救われたい」⁵³⁾。廖、及びムーディのいずれにおいても、この「最も悪い者」を生かす逆説的な救済は、一切の自助的救済、及び自己義認の可能性を否定すると同時に、この「悪人」を救う「キリストの愛」に「感動」を受けた人を、個としてイエスに向き合い、その自由な意志によってかれに仕えることを望む信仰を持つに至らしめる——「新生」を実現するものとして捉えられている。

ただし、廖はここでもムーディの意図を超え、この信条を台湾人教会独立論へと発展的に展開している。彼は話題を教会の現状に転じ、「今の台湾」におけるキリスト教会は、そもそも台湾の他宗教の思想の持ち主たちが集った組織であるために、「未だ完全にはキリスト教の教会になっていない」が、「南部の百以上の教会の大部分は、地方の人々が自分たちで

設立したものであり、またどこでも喜んで毎年毎年自分たちで何百何千もの献金をしている」と述べる。そして、教会組織とは信仰を深く内在化し、「新生」した個々のキリスト教徒によって支えられるということを次のように述べている⁵⁴⁾。

答：「…」すべての教会は道を得たキリスト教徒がいて初めて成り立ちます。道を得ていないキリスト教徒がいれば、教会は倒れます。もしも2、3人の道を得ているキリスト教徒がいる教会があれば、それは大繁盛です。道を得たキリスト教徒が一人だけいる教会は、消えることがないのです。教会があるところには、必ず道を得たキリスト教徒がいるのです。

教会は「道を得た」個々の信徒が支えているのであり、そのような人がたとえ「一人だけ」であっても例外ではないという考えが示されている。「一人だけ」という言葉が明確に表しているように、廖においては、個々の信徒が赦された「罪人」としての自覚を持ち、新生することこそが教会組織の基礎であり、第一の条件であるとされた。この条件を実現する上で廖が重視していた宣教文書の購読やキリスト教教育への呼びかけは、キリスト教徒ではなかった頃からそれに惹かれて彼に影響を与えた両親や、「千円分の本を買っても足りない」と述べて宣教従事者の「修養」の必要性を述べたムーディとの関係性の中で、彼自身が形成し、表明するようになった信条と教会独立論に由来するものであったと言える。

5. おわりに

以上、本稿では日本植民地支配下台湾の長老教会における台湾人教会独立論の模索を、聖職者・廖得のケースに則して考察してきた。具体的にはまず、廖が1957年に著した「68年の回想録」を手掛かりに彼の教育経験を捉え、廖が1902年に自身に施洗した宣教師ムーディを、読書やミッションスクールへの進学への勧め、勉強会や学費の支援などにより彼を聖職者の道へと積極的に牽引した「先生」として記憶していたことを確認した。

本稿はまた、その後1915年に聖職者となった廖得が、これらの経験を学びへの情熱と密接に結びつく独自の教会自治論へと発展させたことを、彼が1910年代から20年代までに投稿した宣教文書より明らかにした。廖は1923年と翌24年を中心に『台湾教会報』誌上で積極的に教会自治を呼びかけ、台湾の教会が真の独立を実現できるかどうかという勝負の時期に差し掛かっているとの現状認識を示した。その上で、信徒には朝鮮宣川における教会自治の成功例や中国で刊行されている漢文宣教文書からの学びを勧め、聖職者には祈祷・勉強・儉約などの「修養」を呼びかけることで、台湾人キリスト者の精神的「自養」の実践を唱道していた。

こうした具体的な行動目標の構想は「新生」し、独立した信仰者の確立を重視した廖得の神学思想に根づくものであり、この点において彼は個々の信徒の自由意志に基づく信仰を呼

びかけたムーディとの重要な共通点を有した。しかしながら、こうしたキリスト教論を、未だ実現していない「台湾人・キリスト者」の自治的教会運営への志向、及びそれに伴われる困難への予見をも射程に含む議論として展開させた点に、廖得の独自性があった。このことを最もよく表すのが、キリスト教における救いの逆説性を踏まえつつ、「悲惨な境遇」こそが「新生」への突破口であると論じる廖の宗教的信条であろう。日本や欧米からの「二重植民」を受けていた台湾人にとって、そもそものスタートラインは挫折的な境遇であったからである。

この点に関わって、1920年代までの廖得の議論には、本稿の冒頭に引いた匿名記事「維新改良：甲乙談」との重要な類似点があることを最後に指摘しておきたい。1920年代という時期の重なりや、甲と乙という架空の人物の問答による論の進め方といった形式上の共通性だけではない。この匿名の筆者が呼びかける台湾人改宗者の「精神文明」の「維新」は、廖得における個々の台湾人信徒への「自養」と「新生」への呼びかけとも重なり合っている。両者が同一の人物であったのかという問題は、同時代の他の台湾人キリスト者がどのような議論を展開したのかという問題と共に、今後検討するべき重要課題である。しかし、いずれの議論も、既存の権力たる日本の政治支配や宣教師の文化的優越の問題を含む植民地台湾という挫折的なコンテクストにおいて、キリスト教思想を真に自身のものとしてゆこうとすることでこそ生まれてきたものであった。ここに、1920年代台湾の長老教会において、宣教論や教会形成論と密接に結びつく形での独特な「台湾人意識」の模索がなされていたことが見出される。

註

- 1) 本稿は、筆者が2015年12月に京都大学大学院教育学研究科に提出した博士論文「宣教師キャンベル・N・ムーディと台湾基督長老教会——文脈化するキリスト教の軌跡」のうち第二章の一部を抜粋し、改稿したものである。
- 2) “Ī-sin Kái-liōng: Kah It tâm [維新改良：甲乙談]”, *Tâi-oân Kàu-Hōe-pò* [台湾教会報], 419 (February 1920): 10–11, 10, 《台灣教會公報全覽：台灣第一份報紙 第7卷 (1920–1924)》、教會公報出版社、2004年に収録。同史料は宣教師考案のローマ字表記法により閩南系台湾語を書き表す「白話字」によって書かれている。
- 3) 1913年及び2014年の企業物価戦前基準指数（基準：1934–36年 平均＝1）を参考に計算すれば、当時の1円は現在の約1,137円に相当する。これを基準に同史料の数値を換算すると、当時の一人あたりの平均月給はイギリスでは約105,741円、日本では約23,877円、台湾では約11,370円となる。また伝道師の年俸については日本では約41万円から398万円、台湾では約11万円から41万円だったこととなる。『明治以降本邦主要経済統計』（日本銀行統計局、1966年7月）。「日本銀行を知る・楽しむ」『日本銀行』閲覧日2016年8月12日 <<http://www.boj.or.jp/announcements/education/oshiete/history/j12.htm>>.
- 4) イングランド長老教会の由来及びミッションの歴史については Band, Edward. *Working His Purpose Out: The History of the English Presbyterian Mission, 1847–1947*. (Taipei: Ch'eng Wen, 1972) を参照。張

- 妙娟《開啓心眼——《台灣府城教會報》與長老教會的基督徒教育》、人光出版社、2005年、17頁、96-97頁。なお、『台湾教会報』は同誌の第340巻（1913年7月）から第565巻（1932年4月）までの名称であり、創刊当初の名称は『台湾府城教会報』であった。したがって本稿では基本的に第340から565巻刊行分以外を「『台湾教会報』系列雑誌」と表記し、注釈にて刊行当時の正式雑誌名を表記する。
- 5) 台湾基督長老教會歴史委員會編《台灣基督長老教會百年史》、台灣基督長老教會、1965年、213-214頁。黃武東・徐謙信合編、賴永祥增訂《台灣基督長老教會歷史年譜》、人光出版社、1995年、168頁。したがって、日本統治期台湾のキリスト教界は主にカトリックと長老派が構成した。日本の領台後には日本基督教会、日本聖公会、組合派など各宗派の教会が台湾宣教を開始したが、これらは在台日本人への宣教を主眼とした。一方で1920年代には日本ホーリネス教会や日本救世軍、中国大陆から伝わった真耶穌教会などによる台湾人宣教が開始された。高井ヘラー由紀『日本統治下台湾における日本人プロテスタント教会史研究』、国際基督教大学大学院 比較文化研究科提出博士論文、2003年、1頁、10-12頁、254-255頁。
 - 6) 吳學明《聚珍堂叢書(1) 從依賴到自立——終戰前台灣南部基督長老教會研究》、人光出版社、2003年、193-234頁。
 - 7) 1918年3月12日、南部大会第四十回會議録、第六十二条、台南長老大會《聚珍堂史料3 南部大會議事録(二) 1914-1927》、教會公報出版社、2004年、113頁、1920年1月6日、南部大会第四十二回春期議會議事録、第八十七条、同上書、197-198頁。前掲《台灣基督長老教會百年史》、137頁、128-129頁。
 - 8) 《臺南神學校校友會雜誌》第一號~四號、臺南神學校、1928年1月-1933年7月。
 - 9) 駒込武『世界史のなかの台湾植民地支配——台南長老教中学校からの視座』、岩波書店、2015年、279-294頁、300-327頁。
 - 10) Op. cit., “Ĭ-sin Kái-liòng: Kah It tâm [維新改良：甲乙談]”, 10.
 - 11) Liāu Tit [廖得], “68 Hôe-ek-liō’k [68年の回想録]”, *Oa’h-miā ê Bí-niū* [日ごとの糧], 32 (January 1957): 39-44, 33 (February 1957): 39-42, 34 (March 1957): 44-48, 35 (April 1957): 41-45, 36 (May 1957): 31-37, 37 (June 1957): 47-50, 38 (July 1957): 38-41, 39 (August 1957): 40-42, 40 (September 1957): 38-41, 41 (October 1957): 42-48, 42 (November 1957): 42-43, 43 (December 1957): 43-49. <珍本聖經數位典藏查詢系統>、《Sin Bông Ài [信望愛]》、閲覧日：2016年8月12日 <<http://bible.fhl.net/ob/ro.php?book=41&proc=0>>.
 - 12) Op. cit., Liāu Tit [廖得], “68 Hôe-ek-liō’k [68年の回想録]”, *Oa’h-miā ê Bí-niū* [日ごとの糧], 32 (January 1957): 39-44, 40-41.
 - 13) Ibid., 42-44. 蔡重陽〈高雄新興教會の創設者——廖得牧師〉、鄭仰恩・江淑文主編《信仰的記憶與傳承——台灣教會人物檔案2》、台灣教會公報社、2013年、248-257頁、248頁。Op. cit., Liāu Tit [廖得], “68 Hôe-ek-liō’k [68年の回想録]”, *Oa’h-miā ê Bí-niū* [日ごとの糧], 33 (February 1957): 39-42, 39.
 - 14) Ibid., 40.
 - 15) Ibid., 40-41.
 - 16) Ibid., 41-42.
 - 17) 例えば、1903年から翌年にかけて『台南府城教会報』に連載した白話字宣教文書「教義談論」にて、ムーディは架空の伝道師とキリスト者の間の平易な会話を通して、キリスト教における「平安」や「愛」、信仰義認、キリスト論、聖霊論などの神学的テーマを扱っている。Mûi Kam-bū

- [キャンベル・ムーディ], “Tâm-lūn Tō-lí [教義談論]”, *Tâi-lâm Hú-sia" Kàu-hōe-pò* [台南府城教会報], 220 (July 1903): 50–52, 221 (August 1903): 59–61, 222 (September 1903): 69–71, 226 (January 1904): 7–8, 228 (March 1904): 23–24. 《台灣教會公報全覽：台灣第一份報紙 第4卷 (1902–1906)》、教會公報出版社、2004年に収録。
- 18) Moody, Peggie C. *Campbell Moody: Missionary and Scholar*, as 洪伯祺《聚珍堂史料4 宣教學者梅監務》、教會公報出版社、2005年、81–132.
 - 19) Moody, Campbell N. *The Heathen Heart: An Account of the Reception of the Gospel Among the Chinese of Formosa*, (Edinburgh: Oliphant, Anderson & Ferrier, 1907). Moody, Campbell N. *The Saints of Formosa: Life and Worship in a Chinese Church*, (Edinburgh: Oliphant, Anderson & Ferrier, 1912).
 - 20) Op. cit., Moody, *The Heathen Heart*, 115–147.
 - 21) Ibid., 243–246.
 - 22) Op. cit., Liāu Tit [廖得], “68 Hōe-ek-liō'k [68年の回想録]”, *Oa'h-miā ē Bí-niū* [日ごとの糧], 34 (March 1957): 44–48.
 - 23) Ibid.
 - 24) Op. cit., Liāu Tit [廖得], “68 Hōe-ek-liō'k [68年の回想録]”, *Oa'h-miā ē Bí-niū* [日ごとの糧], 35 (April 1957): 41–45.
 - 25) Op. cit., Liāu Tit [廖得], “68 Hōe-ek-liō'k [68年の回想録]”, *Oa'h-miā ē Bí-niū* [日ごとの糧], 38 (July 1957): 38–41, 39 (August 1957): 40–42, 40 (September 1957): 38–41. 聖職者としての彼は1920年代の教会自治運動への関与のほか、30年代末から40年代の高雄市「前金伝道所」（現新興教会）の開拓で知られる。また、1948年の牧師退職後には「伝道社」を創設して平信徒の宣教人員を養成し、自ら組み立てた街頭宣教用の三輪車である「福音車」に乗り、各地で巡回宣教を展開した。前掲蔡重陽〈高雄新興教會的創設者——廖得牧師〉、248–257頁。〈廖得的生平史略 (1889–1975)〉、《賴永祥長老史料庫》、閲覧日2017年1月20日 <<http://www.laijohn.com/index.htm>>。原典は蔡重陽《生生不息：高雄市新興基督長老教會設教70週年教會史》、高雄市新興基督長老教會、2009年、117–125頁。
 - 26) Op. cit., Liāu Tit [廖得], “68 Hōe-ek-liō'k [68年の回想録]”, *Oa'h-miā ē Bí-niū* [日ごとの糧], 34 (March 1957): 44–48, 48.
 - 27) Liāu Tit [廖得], “Kàu-hōe Tō'k-li'p [教会の独立]”, *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 462 (September 1923): 1–2. 前掲《台灣教會公報全覽 第7卷 (1920–1924)》に収録。楊註、〈追悼牧師梅監務挽詩〉、*Tâi-oân Kàu-hōe Kong-pò* [台湾教会公報], 664 (July 1940): 13. 《台灣教會公報全覽：台灣第一份報紙 第14卷》、教會公報出版社、2004年に収録。
 - 28) Liāu Tit [廖得], “Bí-kok Kīm-chiū Sēng-chek [アメリカ禁酒の成績]”, *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 470 (May 1924): 9. “Ko-lê Soan-chhoan Kàu-hōe [朝鮮宣川教会]”, *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 474 (September 1924): 2–3. 前掲《台灣教會公報全覽 第7卷 (1920–1924)》に収録。
 - 29) Op. cit., Liāu Tit, “Ko-lê Soan-chhoan Kàu-hōe [朝鮮宣川教会]”.
 - 30) Liāu Tit [廖得], “Pò-to ē Chheh [宣教文書]”, *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 432 (March 1921): 12. “Siāu-kài Pò [刊行物の紹介]”, *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 465 (December 1923): 3–4, 477 (December 1924): 13. “Siāu-kài Pan-gī Chheh [廉価書籍の紹介]”, *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 468 (March 1924): 14. 前掲《台灣教會公報全覽 第7卷 (1920–1924)》に収録。
 - 31) 例えば、「刊行物の紹介」（1924年12月）にて、廖は南京金陵神学校の「神学誌」、上海のアメリカ・メソジスト監督教会の「興華報」、上海長老教会の「公論報」などの刊行頻度や価格を紹介

- 介している。その上で、これらの文書を在台イングランド長老教会の出版室がまとめて購入し、台湾の信徒向けに販売していると知らせている。Op. cit., Liāu Tit [廖得], “Siāu-kài Pò [刊行物の紹介]”, *Tài-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 477, 13.
- 32) Liāu Tit [廖得], “Kàu-hōe-pò Tâu-kó [教会報への投稿について]”, *Tài-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 461 (August 1923): 10. 前掲《台湾教會公報全覽 第7卷(1920–1924)》に収録。
- 33) Liāu Tit [廖得], “Lōe-tē Bo’k-su [内地の牧師]”, *Tài-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 455 (February 1923): 1–2, 1. 同上書に収録。
- 34) Ibid., 1–2.
- 35) Op. cit., Band, *Working His Purpose Out*, 128.
- 36) 前掲《台湾基督長老教會百年史》、13–14 頁。前掲 吳學明《從依賴到自立》、245 頁。
- 37) Op. cit., Liāu Tit [廖得], “Lōe-tē Bo’k-su [内地の牧師]”, 2.
- 38) Op. cit., Liāu Tit [廖得], “Kàu-hōe To’k-li’p [教会の独立]”, *Tài-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 462 (September 1923): 1–2.
- 39) Liāu Tit [廖得], “Kàu-hōe To’k-li’p [教会の独立]”, *Tài-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 463 (October 1923): 1–2, 1. 前掲《台湾教會公報全覽 第7卷(1920–1924)》に収録。
- 40) Ibid., 1–2.
- 41) Ibid., 2. 同様の議論は翌年4月、及び1926年1月の投稿文にも示された。Liāu Tit [廖得]. “Pan-gí Bo’k-su [安い牧師]”, *Tài-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 469 (April 1924): 8–9. 前掲《台湾教會公報全覽 第7卷(1920–1924)》に収録。Liāu Tit [廖得], “Sin-kim Hū-tam-pió [給与負担表]”, *Tài-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 490 (January 1926): 13. 《台湾教會公報全覽：台灣第一份報紙第8卷(1925–1927)》、教會公報出版社、2004年に収録。
- 42) Liāu Tit [廖得], “Iā-so’-sī Sím-mi’-h? [イエスとは何か?]”, *Tài-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 439 (October 1921): 9–10. 前掲《台湾教會公報全覽 第7卷(1920–1924)》に収録。
- 43) Ibid., 9. 晩年のナポレオンの様子は、彼の忠実な部下でセントヘレナ島にも随行したアンリ・ベルトラン(1773–1844)やシャルル＝トリスタン・マルキ・ド・モントロン(1782–1853)らが記録している。例えば、ここでの廖得の引用に呼応するような言葉は、モントロンの記録を元に編輯された「イエス・キリストの神性についてのナポレオンの心情」(1841)に見られる。このことから、おそらくナポレオンとキリスト教に関する物語は当時の欧米世界で比較的によく知られ、宣教文書の題材ともなることで、廖得の知るところとなったのではないかと推測される。Beauterne, Robert François Antoine de. *Fragments Religieux Inédits. Sentiment de Napoléon Sur la Divinité de Jésus-Christ. Pensées inédites recueillies à Ste. Hélène par M. le Comte de Montholon et publiées.* 1841. Google Books, 3 Feb. 2009. Web. 12 Aug. 2016.
- 44) Op. cit., Liāu Tit [廖得], “Iā-so’-sī Sím-mi’-h? [イエスとは何か?]”, *Tài-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 439, 9–10.
- 45) Op. cit., Mui Kam-bū [キャンベル・ムーディ], “Tām-lūn Tō-lí [教義談論]”, *Tài-lâm Hú-sia” Kàu-hōe-pò* [台南府城教会報], 226 (January 1904): 7–8, 8. Mui Kam-bū [キャンベル・ムーディ], *Lô-má-phoe* [ローマ書], (Tài-lâm [台南]: Tsū-tin-tông [聚珍堂], 1908), 121. 梅監務《聚珍堂史料5梅監務作品集》、教會公報出版社、2006年に収録。
- 46) Op. cit., Mui Kam-bū [キャンベル・ムーディ], “Tām-lūn Tō-lí [教義談論]”, *Tài-lâm Hú-sia” Kàu-hōe-pò* [台南府城教会報], 220 (July 1903): 50–52, 51.
- 47) Op. cit., Liāu Tit [廖得], “Iā-so’-sī Sím-mi’-h? [イエスとは何か?]”, *Tài-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会

報], 439, 10.

- 48) Liâu Tit [廖得], “Siông-téng Ki-tok-tô” [上等なキリスト教徒], *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 468 (March 1924): 6–7. 前掲《台湾教會公報全覽 第7卷 (1920–1924)》に収録。
- 49) Ibid., 7.
- 50) Ibid.
- 51) Liâu Tit [廖得], “Pak-tó-lāi ê Kám-hòa” [お腹の中の感化], *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 471 (June 1924): 10–11. “Ki-tok-tô ê Siông-sek Ôân-choân ê Kàu-io̍k” [キリスト教徒の常識、完全な教育], *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 471 (June 1924): 11–12. “Bú-koa” ê Siu-ióng [武官の修養], *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 473 (August 1924): 4. いずれも前掲《台湾教會公報全覽 第7卷 (1920–1924)》に収録。
- 52) Liâu Tit [廖得], “Si’t-giām ê Ki-tok-kàu” [実験のキリスト教], *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 457 (April 1923): 10–11. 同上書に収録。
- 53) Op. cit., Mui Kam-bū [キャンベル・ムーディ], “Tâm-lūn Tō-lí” [教義談論], *Tâi-lâm Hú-sia” Kàu-hōe-pò* [台南府城教会報], 221 (August 1903): 59–61, 60.
- 54) Op. cit., Liâu Tit [廖得], “Si’t-giām ê Ki-tok-kàu” [実験のキリスト教], *Tâi-oân Kàu-hōe-pò* [台湾教会報], 457, 11.